

Heinz Schilling, 1517. Weltgeschichte eines Jahres, Munchen, 2017, 364S.

著者	出村 伸
雑誌名	ヨーロッパ文化史研究
号	19
ページ	115-123
発行年	2018-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00023979/

紹介：Heinz Schilling, 1517. *Weltgeschichte eines Jahres*, München, 2017, 364S.

出 村 伸

1

周知のように 2017 年は、マルティン・ルターが贖宥状を批判する「95 箇条の提題」を発表し、のちに宗教改革と呼ばれる運動の出発点となってから 500 周年に当たる。これを機に、本国ドイツのみならず⁽¹⁾、わが国でも数々の記念論集が公刊された。ここでそのすべてを紹介することはもとより不可能であるが、宗教改革 500 周年に関連して第一線の研究者たちによって取り上げられたテーマの多彩さにはあらためて驚かされるしかない⁽²⁾。

本稿で紹介するドイツの近世史家ハインツ・シリングの新著『1517 ある一年の世界史』は、まさに宗教改革 500 周年の 2017 年に、独自のアプローチから 1517 年の出来事の再評価を目指したものである。その際、忘れてはならないのは、シリングがドイツ近世史の分野でもっともよく知られた宗教改革史・都市史家の一人であるのみならず、近年でもっとも成功したルター伝の著者でもあるということである⁽³⁾。2012 年に上梓されたシリングの浩瀚なルター伝は現在までに 4 版を数え、専門書としては異例の売れ行きを示している。その著者は、新著においてどのように 1517 年の読み直しを試みているのであろうか。

ここで著者ハインツ・シリングを簡単に紹介しておこう。シリングは 1942 年生まれ。フライブルク大学で、オランダからの宗派的亡命者をテーマとした博士論文で学位を取得したあと、ビーレフェルト大学でドイツの領邦国家における近世国家形成と宗派との結びつきを研究し、教授資格を取得する⁽⁴⁾。その後、オスナブリュック大学とギーセン大学を

⁽¹⁾ 宗教改革 500 周年記念に関連した欧米学界での記念出版物、記念行事のポータルサイトとしてひとまず <<https://www.reforc.com>> (2018 年 1 月 1 日現在) を参照。

⁽²⁾ ここではさしあたり 2017 年後半に刊行された以下の 3 冊のみを挙げておく。新教出版社編集部編『宗教改革と現代 改革者たちの 500 年とこれから』新教出版社、踊共二編著『記憶と忘却のドイツ宗教改革—語りなおす歴史 1517-2017—』ミネルヴァ書房、「宗教改革 500 年—社会史の視点から—」『思想』2017 年 10 月号、岩波書店。

⁽³⁾ Heinz Schilling, *Martin Luther. Rebell in einer Zeit des Umbruchs. Eine Biographie*, München 2012 (bisher 4 Auflagen), 724S. 2017 年には Oxford University Press から英訳版が出版された。

⁽⁴⁾ *Konfessionskonflikt und Staatsbildung. Eine Fallstudie über das Verhältnis von religiösem und sozialem Wandel in der Frühneuzeit am Beispiel der Grafschaft Lippe* (= Quellen und Forschungen zur Reformationsgeschichte. Bd. 48). Gütersloh 1981.

経て、1992年に旧東ベルリンのフンボルト大学近世史講座正教授に迎えられ、2010年に教職から退くまでここで教鞭をとった。その間に発表された論文、単著、編著、概説書は多数あるが⁽⁵⁾、シリングがわが国の歴史学界でもよく知られるようになったのは何よりも、ヴォルフガング・ラインハルトとほぼ同時期に提示した「宗派化 (Konfessionalisierung)」の概念による。この概念は、ルター派、カトリック、改革派という三大宗派の確立過程におけるさまざまな国家的・教会的施策の共通性に注目したものであり、周知のように、ゲルハルト・エストラヒヒの「社会的規律化 (Sozialdisziplinierung)」とともに、ドイツおよびヨーロッパ近世史を理解するためのキー概念となっている⁽⁶⁾。

ほぼ300頁の本文、30頁弱の巻末註、15頁ほどの参考文献表からなる本書は広く一般読者を対象としたものである。ルター伝と同様に本書も読者から好意的に迎えられ、刊行の翌月である2017年3月にはドイツの論説誌『シュピーゲル』の専門書ベストセラーリストで9位に入ったという（現在までのところ3刷）。

本書の構成は以下の通りである（各章はさらに2～5つの節に分かれているが、煩雑すぎるので、ここでは章のタイトルのみを挙げる）。

プロローグ

1517——画期となる年への新たな視角

- I. 二つの世界帝国と第三のローマがあらわれるが、抑圧と恣意に逆らう嵐もまた
- II. 平和とお金の安定をめぐって
- III. ヨーロッパとさらなる世界
- IV. ルネサンスと新しい世界知識
- V. 集合的な不安と確かさへの渴望
- VI. ローマの教皇——イタリアの君主、そして普遍的大司教
- VII. ヴィッテンベルクの修道士——「光は東方から」、あるいは文明の辺境でのプロテスタンティズムの曙光

エピローグ：1517——近代の幕開けとしての奇蹟の年？

⁽⁵⁾ シリングの業績についてはフンボルト大学近世史講座のホームページに詳しい：<<https://www.geschichte.hu-berlin.de/de/bereiche-und-lehrstuehle/fruehe-neuzeit/personen/prof-dr-heinz-schilling>> (zuletzt gesehen am 1.1.2018)。

⁽⁶⁾ ひとまず、木村靖二他編『ドイツ史研究入門』山川出版社、2014年、82頁以下参照。

以下では、各章の内容を要約したのち、結びとして若干のコメントを加えて本書の紹介としたい。

2

著者はまずプロローグとして、1517年に起きた世界各地の出来事を、それぞれの出来事を伝える報告の引用という形で紹介する。それはイタリアのベルガモで目撃された幽霊の軍隊どうしの会戦であり、ユカタン半島でのスペイン人とアステカ人との邂逅であり、広州へのポルトガル人の来訪であり、そしてシュトッテルンハイムで修道士になることを誓ったルターの言葉と、1517年10月31日の「95箇条の提題」である。シリングによれば、一見したところバラバラなこれらの報告の背景にはいずれも、地上の出来事に神（神々）が干渉し、人間に天候や天変としてメッセージを伝えるという宗教的世界観があった。神が意図するのが裁きなのか救いなのか、人びとは不安に陥っていたのである。

続いて著者は本書の目的を設定する。ヨーロッパ中心の歴史観の終焉とともに、1517年10月31日の出来事をもって近代の始まりとすることはもはやできない。世界のさまざまな地域における1517年の出来事をグローバルヒストリー的な視点で問い直すのは、1517年のヴィッテンベルクでの出来事の世界史的な意味を正しく理解するためなのである、と。

第1章で取り上げられるのは、近世を通じてヨーロッパ史を規定することになる二つの世界帝国の形成である。1517年、前年に死去した祖父のアラゴン王フェルナンドを継承するため、ブルゴーニュ公カールはカスティーリャに向かい、スペイン育ちの弟フェルディナントに先んじて、スペイン王国の王位を確保した。カールは1519年には神聖ローマ帝国皇帝へと選挙され、ここにハプスブルク家の世界帝国が成立することになる。

ところで、カスティーリャでカールがまず直面したのは王国貴族の反抗だったが、新秩序にたいする不満と反乱はスペインだけの現象ではなかった。中世後期に始まった国家形成プロセスと新しい経済構造にたいして各地で貴族・都市民・農民が蜂起する（例えばロンドンでは1517年の「いまわしきメーデー」）。とくにドイツではその傾向が著しく、帝国国制の変化と諸侯権力による領邦国家形成に圧迫された騎士と農民は、1517年以降にその不満を暴力的に表明することになった。

1516年にシリアを征服した(500年前にもアレppoは戦場だったのだ!)オスマン帝国は、

1517年初頭にエジプトのマムルーク朝を滅ぼし、本格的に北アフリカとアラビアへと進出を始めた。メッカにたいする保護権と、最高の宗教的権威であるカリフの地位を事実上行使できるようになったことで、オスマンは名実ともにイスラーム世界における覇権を確立した。オスマンはさらに北アフリカ経由で地中海西部に進出し、まずはここを舞台として、その後は東ヨーロッパにおいてスペインないしオーストリアのハプスブルク家と抗争を繰り広げることになる。

地中海世界の勢力図が大きく変化した1517年、ほるか北方のモスクワには皇帝マクシミリアン1世の使節団が滞在していた。モスクワ国家はイヴァン3世のもとで君主支配を拡大し、1453年のコンスタンティノーブル陥落後に東ローマ帝位を受け継いだとして（第三のローマ）、ツァーリの称号を名乗るようになっていた。皇帝マクシミリアンは、東方における同盟相手を求めてジークムント・フリードリヒ・フォン・ヘルバーシュタインを団長とする使節団をモスクワに派遣する。政治的には失敗だったこの派遣は、けれども、ヘルバーシュタインの地誌的な旅行記によって歴史に残ることになった。旅行記は16世紀末までに5カ国語で20版を重ね、それまで未知の領域であったロシアの正確な情報が西ヨーロッパ人の知識に加わることになったのである。

第2章は、1517年の思想史的な位置付けに踏み込む。宗教改革が始まる以前からヨーロッパはすでに、中世の（たとえ理念的とはいえ）一体的なキリスト教世界から競合する諸国家の世界へと移行していた。とりわけ15世紀末には、ヨーロッパの構造的な戦争状態（die strukturelle Friedlosigkeit Europas）⁽⁷⁾は個性的な各国君主の登場によって先鋭化し、それはアレクサンデル6世やユリウス2世を教皇とした教皇庁（教会国家）をも例外とはしなかった。それゆえ、対オスマンの十字軍を企図するため、教皇レオ10世は1517年に和平プランをヨーロッパの君侯たちに提唱する。こうした状況のなかで世に出たのが、トマス・モアの『ユートピア』（1516年）であり、1513年から16年のあいだに書き上げられたと考えられているマキャベリの『君主論』（出版は1532年）であり、そしてエラスムスの『平和の訴え』（1517年）であった。1517年には、地動説を発見した天文学者として知られるコペルニクスが、バルト海地域にまで及んだ経済構造の変化に対処するため『貨幣鑄造の原則について』を著わし、グレシャムに先駆けて貨幣価値理論を発表している。

第3章のテーマは、ポルトガル人たちのアラビアと中国での体験と、スペイン人たちの

⁽⁷⁾ Schilling, 1517, S. 85.

新大陸での邂逅である。15世紀末に海上覇権を確立したかにみえたポルトガルは、1517年にアラビア半島と中国で別の帝国に出会うことになる。前述のようにアラビア半島にはオスマン帝国が進出を開始しており、ポルトガルは機先を制するために1517年にジッダを目指して艦隊を派遣した。だが、この艦隊はオスマンによって撃退され、オスマンはジッダ防衛によってイスラーム世界の守護者の地位を確立した。一方でオスマンはインド洋への進出には失敗し、ポルトガルはアジアに向かう東回りルートを維持できた。オスマンは以後、地中海に海洋活動の重点を移すことになる。

同じ1517年、マラッカを発したポルトガル使節団は、明王朝に正式に通商を求めるために広州に向かった。数年もの待機期間ののち、ポルトガル使節はついに皇帝への謁見に成功するが、その間に使節団の何人かは処刑され、中国の高度に発達した官僚制と対等な交易関係を知らない中華思想の宇宙観の前に交渉断念を余儀なくされるのである。

新大陸では1517年2月にキューバを発した船団が3月にユカタン半島に漂着した。これが、ヨーロッパ人がアメリカ大陸の高度文明に初めて出会った瞬間である。しかし、この出会いは武力衝突へと発展し、アステカはコルテスらによって徹底的に破壊されることになる。ただし、これをたんに馬や鉄砲といった武器の差に帰するのは誤りである。天変を読んでスペイン人の到来を神々の帰還と解釈したアステカ支配者層の致命的な誤りが背景にあったからである。

新大陸の高度文明にとって破壊の始まりとなった1517年にはラス・カサスが新大陸から本国スペインへの帰路につく。その目的は、コンキスタドールによるインディオの非人間的な扱いと過酷な植民地政策の変更を王室に訴えることだった。

第4章が扱うのは、1517年当時における知的世界の動向である。ヨーロッパ人が海外からもちかえったさまざまな文物は、ヨーロッパ人の好奇心を強く刺激した（その一例がデューラー作のインド犀の版画である）。他方、16世紀初めにヨーロッパ諸国と支配者を規定していたのはルネサンスと人文主義である。書籍印刷はたしかに大きな役割を果たしていたが、識字率が10%以下の時代にあって印刷業はけっして活況とはいえなかった。ここに突破口をもたらすのが1517年10月31日の出来事である。

ルネサンスと人文主義のネットワークはイタリアからアルプス以北へも延びており、ポーランド、ハンガリーなどの宮廷は直接にイタリアから影響を受けていた。フランスへは15世紀末のシャルル8世の南イタリア遠征がルネサンス文化をもたらした。レオナルド・ダ・ヴィンチはフランソワ1世の誘いに応じて、1517年にクロ・リュセ城へ活動の場を

移す。

ルネサンスと人文主義は、ドイツでは伝統的な形式や思想と混合することになったが、その中心的な場の一つが皇帝の宮廷であった。桂冠詩人の顕彰という権限も 15 世紀のあいだに皇帝が要求するようになったものであり、皇帝マクシミリアンもこれを継承した。皇帝が 1517 年夏にアウクスブルク帝国議会場で桂冠詩人の称号を授与したのが、のちの騎士戦争の中心人物、ウルリヒ・フォン・フッテンである。

第 5 章がテーマとするのは、ルネサンスと人文主義、新しい世界知識といった知的活動の一方で、つねに人びとの生活を彩っていた超自然的な世界解釈と異変にたいする人びとの不安と恐怖である。人びとは天候、物価高騰、飢饉、疫病、戦争といった現象に神の警告を読み取り、最後の審判の到来におびえていた。それは民衆信仰といったものではけっしてなく、終末論的な不安と神の裁きへの恐怖はまったく公式のものだった。ルターを恐怖させ、贖宥と救いの問題に取り組ませたのはまさにこれである。

1517 年にベルガモで目撃された幽霊の会戦は瞬く間に印刷メディアを通じて伝えられ、オスマンへの十字軍を計画していた教皇は、公式にこれを神からの警告と解釈した。1510 年代には最後の審判の到来を予言するさまざまなパンフレットが流布しているが、最後の審判において魂が救われるかどうかは、当時のとくにアルプス以北の人びとにとってはリアルな恐怖だった。1516 年に死去したヒエロニムス・ボッシュの地獄図は、けっして空想ではなく、時代の集合的な不安の可視化だったのである。

そのような不安を背景に強まったのが反ユダヤ主義である。1517 年には、カバラ研究を発表したロイヒリンのように学問的なユダヤ文化との真摯な取り組みもあったものの、当初ユダヤ教徒との融和的な姿勢を示したルターは、ユダヤ教徒に改宗の意思がないことが明らかになると、彼らをキリスト教の純粹性にたいする脅威として弾劾するに至るのである。

第 6 章が対象とするのは、プロテスタント的な歴史叙述が世俗的なルネサンス教皇の頂点として描いたレオ 10 世とその周辺である。しかし、じっさいのレオ 10 世は前任者たちの世俗主義からの決別を宣言し、その平和志向はエラスムスが平和の教皇として讃えるほどであった。それだけにエラスムスは、レオを反キリストとして非難するルターを許せなかったのである。他方で、レオは改革教皇ではけっしてなく、その最大の関心は芸術と、メディチ家勢力の拡大に向けられていた。1517 年 3 月に閉会したラテラノ公会議は、と

りわけアルプス以北の国ぐにが期待した教会改革には踏み入らないままに終わる。

こうして、教会改革はひとまず教皇庁ではなく、各国それぞれに委ねられることになった。スペインでは早期に独自のイニシアティブで教会改革が始まっていた。その中心がトレド大司教フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロスであり、彼によって創立されたコンプルテンセ大学である。この大学を拠点に1517年には最新の人文主義的知見に基づいた最初の多言語対訳新旧約聖書の編纂作業が終了する。しかし、この野心的な聖書を公表する認可が教皇から得られたのは1520年であり、1517年からわずか数年のあいだに状況は大きく変化していた。すでにエラスムスのギリシア語聖書が名声を獲得し、その数年後にはルターらがドイツ語訳聖書の刊行を始めるのである。

本章では最後に、レオ10世時代のローマの変貌とサン・ピエトロ大聖堂の建築が扱われる。贖宥状は、キリスト教世界でもっとも重要な建物であるべきサン・ピエトロの建築に関わるチャンスであったにもかかわらず、実は1517年末になっても期待したような収入を生んではいなかった。ルターの批判以前にドイツでの贖宥状熱は過ぎ去っていたからである。というのも、16世紀初めの15年間にドイツでは少なくとも7つの贖宥状が発売され、信徒は関心を失いつつあった。1517年末にルターの贖宥状批判が人口に膾炙したことで、最終的に大聖堂建築の資金調達は頓挫する。

最終章に至って、シリングの筆はついにヴィッテンベルクにたどり着く。シリングは、ルター自身が「文明の辺境」とよんだヴィッテンベルクを、前章までに描いてきた「新世界」の知識、ローマの壮麗さ、ルネサンスと人文主義の華麗で知的な世界と鮮やかに対比させる。ルターが取り組んだ救いの問題はきわめて個人的なものであり、ルネサンスや人文主義の普遍性とは無縁であった。この辺境性と個人性こそが、宗教的な本質とのルターの取り組みを可能にし、その答えに普遍性を与えた、という著者の指摘は実に印象的である。

すでにルター伝を上梓しているだけに、著者が描く1517年頃のルターの日常生活はきわめて興味深い。この頃のルターは当時進行中だった大学改革の只中におり、大学教授として講義にも、修道士として修道会行政と説教にも、きわめて多忙な日々を送っていた。ルターに特徴的なのは、ローマや知識人たちを熱中させた新しい世界の知識にはまったく関心を示さず、ひたすら神の恵みと救済の問題に集中していたことである。しかし、ルターほどではなくてもドイツの人びとは死後の運命にたいして深い不安を抱いており、それだけに贖宥状にたいする懐疑心ももともと大きかった。1517年にルターは、人びとがもつ

た不安と疑念を学問的に取り上げ、公にすることを決意したのである。

エラスムスら人文主義者の教会批判が一種の知的ゲームであった一方、ルターの教会批判は救いへの根源的な渴望に発するものだった。義認にかんするルターの教義は人びとに慰めと希望を与え、裁く神への恐怖は赦す神への希望に変化した。シリングは、ここにルターの成功の秘密があったと指摘し、本文の叙述を終える。

3

ここまでみてきたように、タイトルとは異なり、本書が叙述するのは言葉そのものの意味での「世界史」ではけっしてない。1517年の日本はもちろんのこと、アフリカもインドも取り上げられず、明王朝についてもポルトガル人との接触という出来事においてのみ触れられる。ここでの世界は、あくまでヨーロッパ人が1517年の時点で認識した世界に過ぎない。

それにもかかわらず、いや、それだからこそシリングは1517年10月31日の意義を、16世紀初頭に急速に拡大し変化しつつあった世界認識というコンテクストのなかに見事に位置づけてみせた。ルネサンスと人文主義を通じて古代の知識と芸術が再発見され、ロシアや遠く離れた大陸への進出によって新しい文物が急速に流入していたヨーロッパ世界の辺境で、そうした新知識とはほとんど無関係に、個人的な葛藤のなかでルターの思想は育まれた。そのルターの答えが普遍性を獲得する背景は、人びとが宗教的魔術的世界観のなかで直面していた神の裁きと救いをめぐる不安（それはヨーロッパのみならず、世界の他の地域にも共通する）である、という著者の説明は説得的である。

つまり、ルターの成功はむしろ前近代的な宗教的魔術的世界観にあるのであって、ルターの思想の近代性にあるのではない。そのことを著者はエピローグであらためて強調している。ヨーロッパ近代を推進するのはルターの教義ではなく、宗教改革から発した敵対的ダイナミズムであり、それによる文化的・社会的・政治的な分裂なのである。ルターは一つの集団のなかにさまざまな信仰があるという事態をけっして認めなかったが、教皇教会への反抗によって分裂の先鞭をつけることになったのはルター自身だった。

1517年10月31日の出来事なしでも、16世紀初頭は世界史的な転換点であった。ハプスブルク家の世界帝国の成立は、フランス王国との対立をさらに激化させ、ヨーロッパにおける列強システムの形成へとつながった。ハプスブルク家の地中海と東ヨーロッパにおける最大の敵となるオスマン帝国は、1517年にイスラーム世界における覇権を獲得し、

19世紀に至るまで中東・バルカン地域の姿を決定づける。これらの地域に大きな影響を及ぼすロシアは、1517年のヘルバーシュタイン一行の訪問以後、ヨーロッパ史に本格的な参入を果たすことになる。

オスマン帝国が地中海に集中したことでインド洋ルートを維持したポルトガルは、中国との正式国交には失敗し、日本へと針路を向けることになる。スペイン人によるアステカとインカの征服は巨大な悲劇であったが、ローマ・カトリック教会にとっては、宗教改革後に世界教会としての地歩を中南米に築くための決定的な一歩となった。ここでも1517年は二重の意味で重要な年号なのである。というのは、中南米でのカトリックの宣教はたんなる征服や強制ではなく、地道な伝道と教育機関の創設の結果であり⁽⁸⁾、新たな宗教的アイデンティティの創出だったからである。

宗教改革500周年であることを出発点とすれば、宗教改革とその影響にのみ焦点が当たるのは避けられないことである。ルターの贖宥状批判は1517年に起きたさまざまな出来事の一つであり、それらは相互に影響し、思わぬ結果を導きながら、現代世界へと連なっていた。そして、そのような連関のなかに位置づけられたことによって、あらためてルターの苦悩と贖宥状批判の世界史的な意義が浮かび上がる。本書が宗教改革を記念して読まれるにふさわしい著作であるゆえんである⁽⁹⁾。

⁽⁸⁾ Schilling, 1517, S. 136f.

⁽⁹⁾ 最後に明らかな誤りを2箇所だけ指摘しておきたい。S. 16-17で「メキシコのインカ」としているのは、アステカの間違いだろう。S. 39でカールの父を「ヨハン (Johann) 美公」としているのは、フィリップ (Philipp) の間違いだろう。